

光と音のない世界で

—盲ろうの東大教授・福島智物語

池田まき子 著 岩崎書店



クローズアップ

旬の本

「私は九歳で失明したのち、十八歳で聴力を失って、全盲ろうになりました。その九年後の二十七歳では腹が出てスマートさをなくし、さらに三十六歳では髪が薄くなつて若さを失いまし

た。本書の主人公は、一昨年まで本紙エッセー「生きるって人となつてなると」を連載していた福島智さん（福神分教会ようほく）。1983年、盲ろう者として国内で初めて大学入学を果たす。2008年には、東京大学先端科学技術研究センター教授に就任。世界でも例を見ないこととして、ディアの注目を集めた。現在は、障害者福祉の研究に携わっている。

本書は、「日本のヘレン・ケラー」とも呼ばれる福島さんの

生い立ちから教授就任までの半生を、児童書として紹介したもの。苦難の中も、持ち前の明るさと努力で乗り越えてきた姿が描かれている。

生後間もなく目に異常が表れ、3歳で右目を失明、小学校で左目の視力も失った。

点字を習得し、新たな生活に馴染んでいった青春時代も苦難は続く。14歳で右耳の高度難聴になり、18歳で残された左耳にも異常が表れた。日々、聴力が落ちていく恐怖

と不安の中で、自身の苦悩の意を機察した。「もし、神がいこのようにしたのなら、何か深い意味があつて、ほくに何かを託しているのではないかと思う」と、苦しみの中に「生きる使命」を見いだす。

またこのころ、点字タイブライターをヒントに、指で言葉を伝達する「指点字」を母・令子さん（同教員）が考案。画期的なコミュニケーション手段を得て、音と光のない極限状況で活路を開いていく。

筆者は、あどろきの中で「すべての人が支えあつて生きていく」「共生の社会」のあり方などについて、多くの子供たちに考えてもらえれば」と本書に込めた思いを語る。

福島さんが逆境に挫けず、道を切り開く姿は、多くの人を勇気づける。本書を題材に、人となつたり合つたりすけ合いの社会について、親子で一緒に考えてみてはいかがだろうか。

親子で考える「共生社会」

価格 1千400円＋税

※本書はおやさと書店BOOK S道友、一般書店でお求めください。道友社の通信販売対象外商品です。